

幼児の社会性の発達に関する研究（I）

— 幼児総合精神検査の結果を中心として —

目 次

はじめに	1
I 研究の目的	2
II 研究の内容と方法	2
1 研究内容と使用した検査	2
2 研究の計画	6
3 調査研究の対象	7
4 調査研究の手続き	7
III 研究の結果とその考察	8
1 調査結果について	8
2 社会性の発達のおくれている幼児	16
3 きょうだいの有無，出生順位による影響	23
4 保育年数の長短による影響	25
5 共かせぎ家庭と普通家庭の幼児	26
おわりに	28

はじめに

人間形成の基礎は幼児期につくられるといわれる。幼児期は心身の発達が著しい時期で、身体的発達の基礎ができあがるとともに、情緒的、知的側面あるいは言語的側面における発達が著しく、また、これらと相まって社会性が急速に発達してくる時期である。健全なパーソナリティの基礎として、これら各側面の調和的発達を図ることが、幼児教育の基本であることはいうまでもないが、幼児期の発達段階にみられる特質と人間性の本質とに目を向けるとき、特に社会的側面にもっと注意を払わなければならないと思う。

人間は本来社会的存在であり、人間の発達は究極するところ社会的発達でしかありえないといわれるように、幼児に発達してくる諸能力は、社会化されてはじめて人間としての発達になることができるのであり、しかも、その社会化は人間的交流をとおして促進されるものである。したがって、そこにつちかわれる社会性は、人間として生活し行動する根源的なもので、人間性の本質につながる重要な側面であるといえる。人間形成ということは、結局、この社会的存在としての人間をつくることである。もっと具体的にいうと、生活に必要な基本的知識と行動、およびその社会の言語を身につけ、自主独立した一個の健康なパーソナリティとしての人間をつくることである。

一方、幼児期の特色をみると、幼児は発達が未分化なため、自己中心的傾向が強く、いまだ社会的存在からはほど遠く、むしろ非社会的存在であるといつてよいが、反面、こうした幼児の内面にも、社会化への傾向が強く芽ばえてきているのである。たとえば、友だちを求めめる欲求が顕著になるとか、社会的関係についての意識が高まるなど、社会性が発達していく基礎的能力が備わってきている。したがって幼児期は、社会化をすすめる、人間としての成長発達を促すのに重要な時期に当たっているといえる。このように幼児期の発達段階の特質からみても、社会性の助成は、幼児教育の中心課題とされなければならないと考える。

ところで、幼児の社会化の促進は、幼児の個性を埋没させるものではけっしてないということをつけ加えておきたい。かえって、幼児ひとりひとりが個性的に成熟するためには、社会性を身につけることが基礎条件となるものである。なぜなら、人間は発達のプロセスにおいて、その社会化に自らを適合させていくとともに、そのような社会的適合の反面として、同時に自己をますます個性化していくものであるからである。教育の目標は、子どもの個性を伸ばし、社会的に有能な人間を育成することにある。この意味からも、社会性の助成は、幼児にとって欠くことのできないものとなる。

幼児の社会性を助成し、健全なパーソナリティの発達を図るためには、まず、現実の幼児の成長発達のプロセスをよく理解することが必要であろう。すなわち、幼児の社会性およびパーソナリティはどのように発達するかということについての理解の上に立って、発達段階に即した適切な指導が加えられなければならないと考える。

本研究は以上のような趣旨に基づいて始めたものである。幼児の社会性の発達に関する研究は多くなされているが、同一幼児についての縦断的な研究はあまりみられないので、本研究はこの点に重点をおいて、幼児の社会性およびパーソナリティの発達を追究していきたいと考える。

I 研究の目的

「幼児の社会性はどのように発達するのか、そして、それは幼児のパーソナリティの形成とどのように結びついているのか」ということについて究明することを究極の目的とするが、本研究では、幼児の精神検査の結果をとおして、特に、次の点を中心に追究する。

- 1) 4～5才児の社会性の発達状態について検討する
- 2) 社会性の発達とパーソナリティ形成の特色との関連について検討する
- 3) 社会性の発達に影響を及ぼす要因について検討する

II 研究の内容と方法

1 研究内容と使用した検査

1) 社会性について

社会性ということばは、社会通念として一般的に使われる場合と、学術語として使われる場合とでは多少その意味する内容を異にしている。そこで、本研究においては、これをどのような内容として考えているかについて明らかにしておきたい。

第1に、社会性ということばは、それだけを切り離して狭い意味にとらえるのではなく、パーソナリティ全体における社会的側面として考える。人間そのものが社会的存在であることから、社会性とパーソナリティとの関連は、切り離すことのできない密接さを持つと考えられる。このことは、吉田専吉氏が述べているように、現代教育における子どもの新しい発達観、すなわち、全体としての子ども、社会人としての子どもという考え方につらなっているといえよう。

第2に、社会性は、社会的行動の原因、すなわち、その機能的根拠とみられる。したがって、社会性は“社会的発達”そのもののもとをなしているはたらきである。社会的発達とは人間としての発達であり、社会性は人間らしく生き行動するための根本的な性質と考えられる。

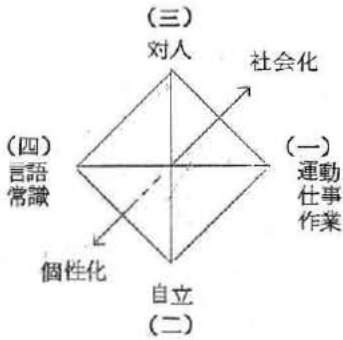
第3に、社会性は個人の身についた内面化された行動体制であり、社会一般に共通してみられる社会的適応行動の総称であるといわれる。また、社会の中から獲得された後天的な社会的習慣群であるともいわれる。すなわち、社会性は、人々との交流をとおして習得された内面的なまどまりである。あるいは、その社会にふさわしく生活するための基本的な行動体制であるといってもよいだろう。

第4に、これをもっと具体的に考えると、社会性とは、生活能力であり、生活技術でもあり、社会的独立と責任を果たす、より有能な人間になっていく機能であるといえる。

以上、社会性の意味、内容について、吉田専吉氏が述べていることを中心にまとめたのであるが、社会性をこのような内容として考えるならば、次に、これを具体的にどのようにとらえていくかが問題となろう。これについて、吉田専吉氏は、具体的な行動項目を次の4つのカテゴリーに集約してとらえようとする。すなわち、(1)運動・仕事・作業、(2)自立、(3)対人、(4)言語・常識がそれで、このカテゴリーでの行動が、それぞれ基礎条件となって、一方には個性化の方向に、他方には社会化の方向に補い合いながら社会性を発達させるものであるとしている。(第1図)

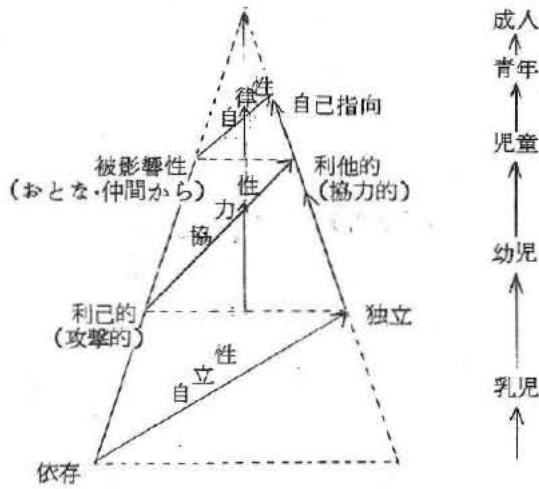
第1図 社会性発達の図式

(吉田専吉氏による)



第2図 社会性発達の図式

(矢吹四郎氏による)



また、矢吹四郎氏の説明は、社会性をどのような視点からとらえたらよいかについて、多くの示唆を与えてくれる。矢吹四郎氏は、社会性をつくる基本的な構成因子として、自立性、協力性（対人関係）、自律性（自己指向）の3つをあげ、社会性発達の方向を次のようにまとめている。（第2図）

自立性（個性化の次元）→ 協力性（社会化の次元）→ 自律性（個性化と社会化が統一される次元）

自分のことは自分でする→ひとと仲よくする→自分で判断し責任をもって行動する

この発達の方式は、もちろん、直線的な方向をとるものではなく、ゆきつもとどりの現象のうち、線的な方向をとって発達するものであると思われるが、それぞれの発達段階の基本的な要点をおさえる上に、大きな意義があると考えられる。

以上、社会性の内容とそのとらえ方について、上述の両氏の考えているところを引用しつつ述べてきたが、本研究においても、基本的にはこの考えに基づき研究をすすめたいと考える。

ただ、本研究においては、取り扱う対象が幼児であるため、社会性の内容としては、最も基本的な事からと、上述の因子としては、社会性発達の初期の段階に属する“自立性”に重点がおかれることになる。そして、実際にこれらを測定する方法として、既製の検査用紙を使用したので、前述の内容をすべて網らするというわけにはいかず、検査用紙に設けられている項目を中心に検討を加えるということにした。

社会性を測定するために使用した検査は、次のようなものである。

ア 幼児総合精神検査（牛島義友 星美智子 共著）

この検査は、1つの精神検査を行なうことによって、知能、性格、社会性の診断が同時にできるよう作製されている。手引書に「知的能力と適応性、性格、すべてが有機的な全体構造をなしており、その全体的な理解によってのみ、正しいパーソナリティの理解ができる」と解説されているように、幼児の社会性を、その全体的なパーソナリティとの関連においてとらえるのに使用できる検査といえよう。

この検査による社会性の診断は、社会的な生活能力として、日常生活の自立（親の評定）、生活技術（紙切りとハンカチ結び）、人間関係—社会的関係—の認識（定義）、常識、言語能力（語い、定義）の面から、社会性として、検査中の態度からなされるが、前者は総合されて社会的な生活能力指数（S_Q）で、後者は社会点で表わされる。

この社会的な生活能力について、手引書には次のように解説されている。「社会的な生活能力は、潜在的にもっている能力ではなく、現実には発揮している生活力である。……実際の日常生活や社交においてどれだけのことをしているかをみようとすることである。やらせればやれるというのではなく、実際にやっているか否かが問題となる。したがって、これは、彼の日常生活の評価であり、また、彼が自分の本来の能力をどのように発揮するように訓練されていたかを示し、教育やしつけの程度をみるものである。また、これは、彼が生活経験を多く積み重ねていくほど増大してくるような生活力である。しかも、特定の教科学習のような知識ではなく、日常生活の中で獲得される知識である。」

ここに引用した説明は、社会性の内容について前述した第4の事がらに一致するものである。したがって、この検査で測定される社会性は、主として社会的な生活能力であり、それに、検査中の態度から対人関係への適応が評定される。

1 社会成熟度診断検査（鈴木清著）

この検査も、社会生活に必要な能力（社会生活能力）の発達をみるもので、子どもの社会的成熟を2つの領域に大分し、第1は、社会生活能力として、1. しごとの能力、2. からだのこなし、3. ことば、4. 集団への参加、5. 自発性（自主性）、6. 自己統制の6つの面から、第2には、社会生活能力の基礎である基本的習慣を、清潔、排泄、着衣、睡眠、食事の5つの面から診断するようになっている。

この検査で測定しようとする社会生活能力について、手引書では次のように説明している。「社会生活能力は、単純な成熟によるものというよりも、環境との関係で生活の間に獲得される能力であると考えらるべきであろう。この社会的成熟は、子どもが生まれつきもっている素質と、子どもがおかれている環境条件によって規定される。そしてこの社会的成熟が遅れていることは、子どもとしての生活能力の遅れを意味し、社会的適応を困難ならしめる。逆にいえば、社会的成熟がよくとげられていることは、子どもの知的、身体的能力についても、子どもをめぐる環境条件、しつけについても望ましい状態であることを裏書きすることになる。」

この説明から明らかなように、この検査でみようとすること社会性も、上述の検査に通ずる社会的な生活能力を主たる内容としている。ただし、この検査の評定記入者は幼児の保護者である。

2) 親子関係（環境的要因の1つとして）について

人間はそのおかれた社会環境の影響を受けつゝ、そのパーソナリティを発達させていくものであるが、幼児期の社会環境として、決定的に重要な影響を与えるのが家庭環境であり、とりわけ、家庭内の人間関係が幼児のパーソナリティ形成に与える影響は、いくら大きく評価してもしすぎることはないといわれる。特に、親子関係はその中核をなすもので、この関係がどのようなものであるかを追究することは、幼児のパーソナリティ形成を理解する上にどうしても必要なことである。

ところで、親子関係のは握は、一見簡単なようで実はなかなかむずかしい。その理由の第1は、親子関係はあまりに密接で一体的な関係であるため、親子どちらもこの関係を客観的に眺めるのがむずかしいこと、第2に、こうした調査そのものを被験者はあまり喜ばず、いいかげんな答えをしやすいくこと、

第3に、こうした拒否的態度を強めるものに、この関係に対する本来の秘密意識があるということである。親子関係の実相を把握するにはこのような難点が伴うが、これをできるだけ正確に客観的にとらえるには、少なくとも次の3つの観点から測定されなければならないといわれる。すなわち、第1は親による報告、第2は観察者による報告、第3は子どもによる報告がそれで、親子関係はこの3つの観点から総合的には把握する必要がある。特に、親が意識して報告する親の態度と、子どもがそれをどのように受け取っているかという子どもの意識する親の態度との関係が明らかにされなければ、親子関係の把握はじゅうぶんとはいえないであろう。

ところで、本研究においては、対象が幼児であるため、親子関係を子どもの側から聞き取ることは不可能であった。この点、いささか片手落ちといわざるをえないが、親子関係の一端を知る意味で、幼児の親に次のような検査を実施した。上述の不備な点を考慮の上、参考にしていきたいと考える。

親子関係診断テスト〔両親用〕（品川不二郎・品川孝子共著）

この検査の問題項目は、親の子に対する望ましくない特徴的な態度を5つ取り出し、それをさらに、それぞれ2つの型に分けている。すなわち、拒否的態度（消極的拒否型・積極的拒否型）、支配的態度（厳格型・期待型）、保護的態度（干渉型・不安型）、服従的態度（溺愛型・盲従型）、矛盾・不一致的態度（矛盾型・不一致型）がそれで、この5つの親の態度の内容は、次のような意味をもっている。

拒否的態度

親の子どもに対する態度に、拒否的傾向がある場合で、たとえば、子どもへの愛情の欠如、援助の拒否、子どもの働きかけに対する無視のような態度をいうのである。「消極的拒否型」は、主として子どもに対する無視、放任、無関心、不信用、悪感情、不一致感などを示す親のタイプである。「積極的拒否型」とは、子どもに対する体罰、虐待、威嚇、屈辱、過酷な要求、保護養育の責任の放棄などの態度を示す親のタイプをいう。

支配的態度

子どもに対して過度の支配力をもつ親で、子どもは親の所有物とみなし、絶対の権力で統制しようとする態度である。「厳格型」は子どもに対する愛情があっても、常に厳格、がん固、強制などの態度をとり、命令、禁止、批判で絶えず子どもを監督している親のタイプである。「期待型」は、親の要求や野心を子どもに強要する態度で、子どもの素質、能力、適性、希望などを無視して、もっぱら親の要求する方向や水準へ従わせようとするタイプである。

保護的態度

子どもに対して心配、不安、恐怖などをいだいている親は、しばしばその感情を、子どもを過度に保護することによって解消しようとする。「干渉型」の場合は、やや期待型に共通した親の感情があり、子どもをよりよくするために、こまごまとした世話をやき、できるだけ助力やさしさを与えようとするタイプである。「不安型」は、子どもの日常生活、学業、健康、交友関係、将来の進路などに、ほとんど無意味と思われるほどの心配や不安をいだし、そのため必要以上の責任をとり、過度の援助や保護を与えるタイプである。

服従的態度

子どもの要求や主張は何事であれ無条件で受け入れてやり、そうすることに満足している親がある。単に子どもに対する愛情が過多であるばかりでなく、子どもに服従的に奉仕することによって、むしろ親の高たされない感情を補っているタイプを服従的タイプの親という。「でき愛型」は、文字どおりのかわいがりすぎて、子どもをそばにおいて相手をしてやることを何よりの楽しみとし、ささいなことに賞を与え、必要以上にかばってやり、悪いことに対しても味方になってやり、少しも子どもを手放したがないタイプである。「盲従型」は、いっさいの権力を子どもにもたせ、親はどんな犠牲を払っても子どもの要求を入れてやるようとするタイプである。

矛盾・不一致的態度

一人の親が時と場合により、しつけや態度に矛盾をきたしたり、また両親の態度が一致しなかったりする場合で、子どもの同じ行動に対して、ある時はしっ責したり禁止したりしながら、またある時は見のがしたりするような一貫性の欠如している親の態度を「矛盾型」と呼ぶ。「不一致型」の両親では、両親の態度が一致せず、たとえば、父親は拒否的であり、母親は保護的であるとか、あるいは母親が支配的であり、父親が服従的であるかで、子どもが両親から異なった取り扱いを受けているタイプである。（手引書による）

この検査の各型には10項目の問題があり、その回答による得点(粗点)から、各型ごとにパーセンタイルが求められる。これはさらに、親の態度を縦と横(東西南北)の軸にとったダイアグラムに表わすことができるようになっている。親の態度は、このパーセンタイルが低くなるほど好ましくないわけで、20パーセンタイル以下は危険、20から40パーセンタイルまでは準危険地帯とされる。

この検査は、両親用と児童・生徒用とからなり、親自身の自己評価と子どもからみた親の態度の評価の両面から診断されるようになっていたが、本研究では、前述したように両親用のみを使用した。

なお、本検査の後半に、第2部として、両親が評定する子どもの問題徴候の項目がかかげられている。その項目は次のように7大別されるが、調査に当たっては、対象が幼児であるため、Gの項目を省いた。各項目に含まれる内容は次のようなものである。

A、反社会性

1. 乱暴、破壊、粗暴
2. 非協調、非協力、わがまま
3. 反抗
4. 悪口、かげ口、つげ口
5. 自慢、自己顕示、見え坊
6. 規則を守らない、無作法
7. 無責任、約束を守らない
8. 残忍、同情心欠如、意地悪、自己中心
9. 出しやばり、おせっかい、ボス、おべっか、がき大将、奇声、奇行
10. 非行、うそ、盗み、性的非行、利己心

B、非社会性

1. 孤独
2. 集団不参加
3. ひっこみ思案
4. 槍病、弱虫
5. 無口、無表現、陰気
6. 子どもらしさの欠如
7. 对人的不適応、对人技術欠如

C、自己評価・興味・意志の問題

1. 劣等感
2. 反省過剰、罪悪感、逃避
3. 興味欠如
4. 無気力
5. 計画性欠如
6. 自律性欠如、根気なし
7. 注意散漫、落ちつきなし

D、退行性

1. 赤ん坊じみている、甘えん坊
2. ひねくれ、すねる
3. 泣虫、だだっ子

E、神経質・神経的習慣・神経症

1. 神経質
2. 神経的習慣
3. 神経症の徴候

F、生活習慣

1. 食事の問題
2. 衣服の問題
3. 睡眠の問題
4. 清潔の問題
5. 生活態度
6. 両親に対する態度の差

G、学力・能力

1. 学業不振
2. 学習嫌い
3. 勉強し過ぎ
4. 学業不安、学業劣等感

(手引書による)

以上の項目ごとに、評定の程度に応じて採点し数量化する。

3) その他の環境的要因について

幼児のパーソナリティ形成に影響を与える要因として、特に親子関係がその最も重要なものであることは前述したとおりであるが、そのほか、さまざまな要因がからみ合って影響していることはいうまでもない。そこで、それらの要因の一端を知るために、対象幼児を環境や経験の違いによってグループ分けし、各グループ間の差異をみることにした。その観点として、次の3つを取りあげ、検討してみようとするのである。すなわち、1つには、きょうだいの有無、出生順位の影響はどうかということ、2つには、施設における経験の長短の影響はどうかということ、3つめに、共かせぎ家庭とそうでない家庭とではその影響の違いがあるかどうかということについてである。このために使用した資料は、保育所や幼稚園に報告されている幼児ひとりひとりについての調査書である。

2 研究の計画

幼児の社会性の発達に関して、本研究では上述のような内容で研究をすすめるが、これをもって、本

主題の研究を終了とするのではなく、さらに次年度も引き続いて研究をすすめる予定である。すなわち同一幼児を対象に、3年間継続して必要な調査研究を行ない、その成長発達のプロセスを究明したいと考えている。その計画の概要は次のとおりである。

第1年次………幼児（4～5才児）に精神発達検査を実施し、その親に社会成熟度診断検査と親子関係診断検査を実施して、対象幼児の社会性およびパーソナリティの各側面をとらえ、その発達に影響を及ぼす要因について検討する。

第2年次………対象幼児に上記の精神発達検査を実施し、さらに、集団生活への適応面を調査して、幼児の社会性およびパーソナリティの発達がどのように行なわれるのかを検討する。

第3年次………対象幼児に上記の精神発達検査を引き続き実施し、さらに、対象幼児が学齢に達しているので、学校生活への適応面を調査して、上記のことを検討する。

3 調査研究の対象

新潟市内（住宅地域）の保育所、幼稚園の2年保育児 58名（男子24名、女子34名）

A保育所………13名（男子4、女子9）

B保育所………24名（男子12、女子12）

C幼稚園………21名（男子8、女子13）

各園（保育所、幼稚園の両者を含めて以下このように呼ぶ）の2年保育児は、特に選択するよりなこととはせず、同一クラス全員を対象とした。幼児総合精神検査を実施した幼児は67名であったが、親の転勤で退園したものや、親に実施した調査の回答が不備なもの、また、回答のなかったものを除いたため、本研究の対象は58名になった。

対象の選定は、次のような理由による。まず、幼児の年齢については、本研究の主題や研究意図から考えて、できるだけ年少なほうが望ましいのであるが、実際に園に収容されている年少児は数が少なくまとまった人数が得られなかったことから、2年保育児を選ぶことになった。地域については、幼児の生活を規定する大きな要因となる社会的な層をできるだけ同一にするため、住宅地域を選んだ。A保育所、C幼稚園は、新潟市内でも典型的な住宅地域にあり、また、B保育所も、その延長線上に新しく発展してきた住宅地域にある。したがって、各園に通園している幼児は、これらの住宅地域に生活する幼児で、その保護者の階層は、いわゆる勤め人がほとんどを占めている。

4 調査研究の手続き

1) 調査の実施

- ①幼児総合精神検査については、検査者（筆者）が各園におもむき、幼児ひとりひとりについて、直接検査した。
- ②社会成熟度診断検査、親子関係診断テストおよび上記検査の保護者記入用は、調査の趣旨を記した依頼状をそえて、園を通じて各家庭で実施した。
- ③調査終了後、ひとりひとりの幼児について、上記検査の結果の概要を園に報告し、園における幼児の状況を聴取した。

2) 実施期間

昭和39年9月～10月

3) 調査結果の処理

各検査の結果は手引書に従って採点し、必要に応じて各項目ごとに得点を整理し、それに対応する年齢段階あるいはパーセンタイルを出した。親子関係診断テストの無答の問題項目には0点を配した。

III 研究の結果とその考察

1 調査結果について

始めに、対象幼児について、研究目的の(1)およびそれに関連するパーソナリティの各側面などの全体的な傾向をは握するために、実施した諸検査の結果をまとめておく。

1) 幼児総合精神検査の結果

本検査の総合得点から知能偏差値が算出され、その問題の一部である図版の叙述と人物画とから性格面が評定される。また、総合得点に含まれる検査の一部(定義、常識、語い)と検査場面で行なう生活技術、日常生活での生活能力(親の評定)、さらに検査中の態度から社会性が評定されるようになっている。

対象幼児の生活年齢は平均4才10か月であるが、実際は4才5か月から5才4か月までの年齢を含んでいる。この1年以内の差で、個々の幼児の生活年齢と総合得点との相関関係をみると、相関係数は0.24となり、両者の相関は低い。これは、個々の幼児の間に、生まれながらにもっている能力やその後の生活経験、あるいは親の養育態度、しつけなどに、大きな個人差があるためと考えられる。

本検査による結果を各側面についてまとめると次のようになる。

ア. 知能

対象幼児をグループ別にして、知能偏差値の平均をとると、第1表、第2表、第3表のような結果になった。男女別、保育所・幼稚園別にみた場合、特に有意の差はみられず、全体としては大体全国の標準に近いといえる。

これを度数分布表で男女別、保育所・幼稚園別に示すと、第3図、第4図のようになる。

第1表 知能偏差値

群	実数	偏差値の平均
男子保育所児	16名	46.5
男子幼稚園児	8名	53.1
女子保育所児	21名	49.1
女子幼稚園児	13名	52.3

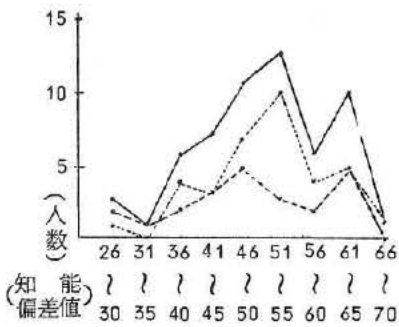
第2表 知能偏差値(男女別)

群	実数	偏差値の平均
男子	24名	48.7
女子	34名	50.3
全体	58名	49.6

第3表 知能偏差値(保・幼別)

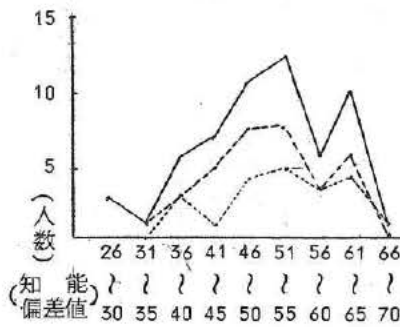
群	実数	偏差値の平均
保育所児	37名	48.0
幼稚園児	21名	52.6
全体	58名	49.6

第3図 知能偏差値の分布(男女別)



----- 男子 女子 —— 全体

第4図 知能偏差値の分布(保育所・幼稚園別)



----- 保育所児 幼稚園児 —— 全体

男女別では、男子の方の分布に2つの山(多少低い方とやや高い方に)がみられるが、全体的には、特にかたよった分布ではない。

1. 性格

6枚からなる図版の叙述と、男子像を描かせる人物画から、いわゆるプロジェクティブ・テクニックにより性格の評定がなされる。ここでは、図版の叙述による異常反応の項目と、人物画の反応項目とを取りあげ、その項目に反応を示した人数を、各グループ別に示した。

第4表 性格面の反応

群	項目	人物画による反応				図版の叙述による反応				
		S型	M型	F型	N型	(1) 敵意	(2) 不満	(4) 拒否	(6) 孤立	(8) 不安
男子	保育所児	3	2	3	2	0	2	2	2	0
男子	幼稚園児	0	2	1	0	0	1	1	1	0
女子	保育所児	1	4	6	1	1	0	1	5	0
女子	幼稚園児	0	2	3	1	0	1	0	6	1
男	子	3(125)	4(166)	4(166)	2(83)	0	3	3	3	0
女	子	1(29)	6(176)	9(264)	2(58)	1	1	1	11	1
保	育所児	4(108)	6(162)	9(243)	3(81)	1	2	3	7	0
幼	稚園児	0	4(190)	4(190)	1(47)	0	2	1	7	1
全	体	4(68)	10(172)	13(224)	4(68)	1	4	4	14	1

(注) 図版の叙述による異常反応のうち、(3)執ようさ(5)劣等感(7)ひねくれの項目には反応がみられなかったため左の表から省いた。

数字は反応を示した人数の実数、()内は各グループの総数に対する百分比(以下の同種の表においても同じ)

人物画反応の各類型は、次のような意味をもつ

S型・・・エゴ発達の強大、男性的、積極的、楽天的、陽性、自己主張的であるもの

M型・・・エゴ発達の弱小、女性的、消極的、悲観的、陰性、依存的であるもの

F型・・・コンフリクトとフラストレーションをいっしょにしたもの、すなわち、精神葛藤(かっとう)、精神的困難、複合欲求不満、焦燥など

N型・・・神経質と精神病性格とをいっしょにしたもので、精神病質、分裂病的、そううつ病的、偏執的、妄想的、神経病的、神経症的傾向であるもの

(手引書による)

図版の叙述による異常反応の方は、項目の性質と幼児の言語による表現力の乏しさの点から、反応の実数は少なくなっている。ただ、(6)孤立の項目に反応が多くみられたのは、図版の絵柄からきた現象ではないと思われる。

人物画による反応の方は、各項目ごとにグループ別にみると、男子保育所児にS型の反応が多いことと女子にF型がやゝ多いことなど多少差がみられるが、特に問題とすべき特徴ではないと思われる。全体的には、M型とF型に反応が多く現われている。

ウ. 社会性

社会性を評定するために構成されている各検査項目の得点と、それらを総合して評定される社会的生活能力指数(S.Q.)および検査中の態度の評定(社会点)を、各グループ別に平均で示すと、第5表のような結果になる。

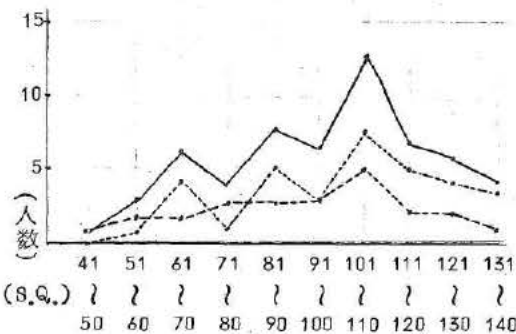
第5表 社会的な生活能力および社会点

グループ	項目	親の評定	a 紙きり	b ハガ 結び	生活術 (a+b)	定義	常識	語い	S.Q.	社会点
	男子保育所児	28.5	5.4	3.8	9.3	4.0	4.6	4.6	91.4	0.2
	男子幼稚園児	27.6	5.2	2.5	7.7	4.6	5.1	4.7	92.9	1.0
	女子保育所児	25.4	5.3	4.5	9.9	5.4	5.0	3.5	99.6	1.4
	女子幼稚園児	26.4	4.6	4.3	9.0	6.0	5.3	3.5	104.7	1.9
	男子	28.2	5.3	3.4	8.7	4.2	4.7	4.6	91.5	0.4
	女子	25.8	5.1	4.4	9.5	5.6	5.1	3.5	101.1	1.6
	保育所児	26.2	5.4	4.2	9.6	4.8	4.8	4.0	96.0	0.9
	幼稚園児	26.9	4.9	3.6	8.5	5.5	5.2	4.0	100.2	1.5
	全体	26.8	5.2	4.0	9.2	5.0	5.0	4.0	97.5	1.1

なお、社会的な生活能力指数の度数分布表を、男女別、保育所・幼稚園別に示すと、第5、第6図のようになる。

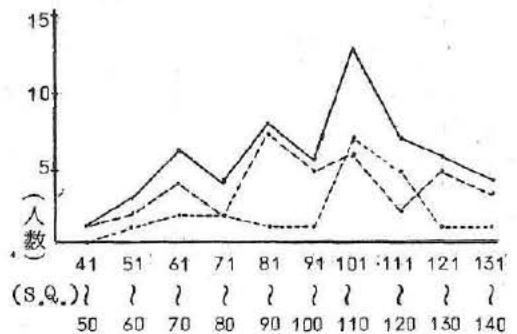
S.Q.以外は各項目の得点の平均(以下の同種の表においても同じ)

第5図 社会的な生活能力指数の分布(男女別)



----- 男子 女子 —— 全体

第6図 社会的な生活能力指数の分布(保育所・幼稚園別)



----- 保育所児 幼稚園児 —— 全体

第5表から、社会的な生活能力指数および社会点で、男女別のグループ間にかなりの差がみられるが、これは男女間の性差を示しているようにも思える。また、保育所・幼稚園別では、幼稚園児の方が多少よい結果を示している。これについては、それぞれのグループの素質的、環境的要因が大きく影響して

いるように思われる。分布表の上にも、このことが示されているようで、保育所児の方はやや低い指数のところ、幼稚園児の方はやや高い指数のところ、それぞれの最多数が集中している。

社会性検査の各項目別にみると、日常生活での生活能力(親の評定)は、男子より女子の方に低い評定がなされているが、紙切りとハンカチ結びを総合した検査場面での生活技術については女子の方がよく、また、語いの量では男子の方がよいが、定義と常識では女子の方がよい得点になっている。

保育所・幼稚園別では、生活技術の面は保育所児の方が得点がよく、定義、常識、語いなど言語との関連が強い面では、幼稚園児の方が得点がよくになっている。

と、で、生活技術と常識について、下位検査における各項目の合格率を、男女別にみると次のような結果になった。

第6表 紙切り

項目	男子	女子	全体
はさみを使って、形を大 体線にそって切りぬける	9(37.5)	17(49.9)	26(44.7)
形をやさきれいに 切りぬける	14(58.2)	16(47.0)	30(51.5)

第7表 ハンカチ結び

項目	男子	女子	全体
1つ結び、または こま結び1回	8(33.3)	6(17.5)	14(24.0)
こま結び2回	10(41.6)	26(76.4)	36(62.0)

数字は人数、()内はグループの総数に対する百分比(以下の同種の表においても同じ)

第8表 常識

問	題	男子	女子	全体
1.	鼻、眼、口、耳(を指で示させる)	23(95.8)	33(97.0)	56(96.5)
2.	姓名(をいわせる)	23(95.8)	34(100.0)	57(98.2)
3.	寒いときはどうしますか	15(62.5)	27(79.4)	42(72.4)
4.	のどがかわいたときはどうしますか	23(95.8)	33(97.0)	56(96.5)
5.	公園で小さい子が迷子になって泣いているのをみつけたときどうしますか	11(45.8)	22(64.7)	33(56.8)
6.	自動車の通る大通りを向う側へわたるときはどうしますか	20(83.3)	22(64.7)	42(72.4)
7.	友だちがうっかりしてあなたの足をふんだときはどうしますか	0	3(8.8)	3(5.1)

数字は人数、()内はグループの総数に対する百分比(以下の同種の表においても同じ)

はさみを使って紙を切りぬく作業は、男子の方にすぐれているものがやや多くなっているが、男女間に特に大きな差はない。男女とも合わせて全体に、切りぬき方のへたなものはいたが、はさみを使うことができない幼児はいなかった。

しかし、ハンカチ結びでは、こま結び2回できる幼児は男子の方に41.6%、女子の方に76.4%と差があり、女子の方がすぐれている。こま結び2回できるということは、たとえば、自分の弁当箱をハンカチに包んで結ぶことができることを意味し、自分のものは自分で始末する能力に通ずるものである。全体の幼児の中には、ハンカチ結びが全然できない幼児も若干(約14%)いた。

常識については、男女間に大きな差はなく、また、手引書に示されている4才、5才級の標準と大体一致するが、問題6は手引書の標準より合格率がよくなっている。これには、園での交通指導がよくゆきとどいていることが影響していると思われるが、都市部に生活する幼児の特色の一端を示していると

もみられる。

生活技術、常識については以上のとおりであるが、その他の定義、語い、日常生活の自立（親の評定）についても、第5表に示されているように、全体としては、4才、5才級の標準に達している。

検査場面における幼児の態度については、社会点で示されているが、この内容を項目別、評定段階別に整理すると第9表のようになる。

第9表 検査場面での態度

評定項目	評定段階 対象			(+)			(0)			(-)		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
(1)同伴者から	21(87.5)	29(85.2)	50(86.2)	3(12.5)	5(14.7)	8(13.7)	0	0	0			
(2)質問に対して	11(45.8)	23(67.6)	34(58.6)	9(37.5)	7(20.5)	16(27.5)	4(16.6)	4(11.7)	8(13.7)			
(3) "	6(25.0)	8(23.5)	14(24.1)	15(62.5)	21(61.7)	36(62.0)	3(12.5)	5(14.7)	8(13.7)			
(4) "	1(4.1)	5(14.7)	6(10.3)	15(62.5)	19(55.8)	34(58.6)	8(33.3)	10(29.4)	18(31.0)			
(5) "	5(20.8)	12(35.2)	17(29.3)	12(50.0)	14(41.1)	26(44.8)	7(29.1)	8(23.5)	15(25.8)			
(6)わからないとき	7(29.1)	14(41.1)	21(36.2)	10(41.6)	16(47.0)	26(44.8)	7(29.1)	4(11.7)	11(18.9)			
(7)言 語	3(12.5)	8(23.5)	11(18.9)	17(70.8)	24(70.5)	41(70.6)	4(16.6)	2(5.8)	6(10.3)			
(8)態 度	3(12.5)	3(8.8)	6(10.3)	17(70.8)	25(73.5)	42(72.4)	4(16.6)	6(17.6)	10(17.2)			
(9)興 味	1(4.1)	2(5.8)	3(5.1)	21(87.5)	27(79.4)	48(82.7)	2(8.5)	5(14.7)	7(12.0)			
(10)緊 張	0	0	0	20(83.3)	32(94.1)	52(89.6)	4(16.6)	2(5.8)	6(10.3)			
(11)自 信	0	0	0	23(95.8)	33(97.0)	56(96.5)	1(4.1)	1(2.9)	2(3.4)			
(12)動 作	0	1(2.9)	1(1.7)	21(87.5)	30(88.2)	51(87.9)	3(12.5)	3(8.8)	6(10.3)			

数字は人数、()内は百分比（以下の同種の表においても同じ）

※ 各項目の評定段階の内容は次のようになっている。

(1) 同伴者から	すぐ離れる	離れにくい	離れないで同伴者と入室したり、泣く
(2) 質問に対し	すぐ答える	繰返しきかないと答えない	いつまでもだまっている
(3) "	よく考えて答える	ふつつ	よく考えないで答える
(4) "	思っていることをうまく表現する	ふつつ	表現力に乏しい
(5) "	ものがはっきり言える	ふつつ	小さい声で話す、語尾がはっきりしない
(6) わからないとき	考えてからわからないという	すぐわからないという	だまってしまう
(7) 言 語	明瞭	ふつつ	不明瞭、吃音、赤ちゃんことば
(8) 態 度	おちついている	ふつつ	おちつきがない、気が散りやすい、へやの中を歩きまわる、つねに身体を動かしている、あきやすい、洋服やまわりにあるものをいじる
(9) 興 味	興味をもち積極的	ふつつ	興味がなく消極的
(10) 緊 張	ふだんと変わらない態度	ふつつ	緊張している
(11) 自 信	自信にみちた態度	ふつつ	自信がない態度
(12) 動 作	早い	ふつつ	おそい、のんびり、慎重

(+)

(0)

(-)

男女間に特に目立つ差はないが、全体としての傾向には、次のようなことがいえるようである。項目(1)と(2)は、幼児の半数以上が(+)の方に評定されている。これは、対象が保育所、幼稚園の園児であるため、施設での生活で自然に訓練された結果であろうと思われる。半数近くは、(0)の段階に評定されているが、(+)の段階にもかなり多く評定されているのが、項目(3)、(5)、(6)である。これは、施設での生活を通じて、もっと多くなることが期待されるものであろう。その他の項目は、半数以上が(0)の段階に評定されている。(−)の段階では、項目(4)、(5)、(6)、(8)などがかなり目立っている。

なお、本検査によって測定された知能偏差値と、社会的な生活能力指数との相関関係をみると、相関係数0.67(表からの推定による信頼度 5%水準 $0.5 < 0.67 < 0.78$, 1%水準 $0.37 < 0.67 < 0.82$)となり、両者の間には、かなり高い相関があるといえる。

2) 社会成熟度診断検査の結果

社会成熟度診断検査の結果を、男女別、保育所・幼稚園別に、各項目の粗点(得点)の平均と、それに対応する年齢段階および社会成熟度指数(S.Q.)で示すと、第10表のようになる。

第10表 社会成熟度診断検査

領域 項目 群	社会生活能力						基本的習慣					計	S.Q.
	仕事の 能力	からだの こなし	ことば	集団へ の参加	自発性	自己 統制	清潔	排泄	着衣	睡眠	食事		
男 子	14.6 (5:7)	15.9 (4:10)	15.6 (4:11)	14.6 (4:11)	15.7 (5:5)	15.6 (5:7)	8.6 A~B	9.5 A~B	9.1 A~A	8.2 A~B	17.4 A~A	1455 (5:2)	10.5
女 子	12.0 (4:9)	14.2 (4:2)	15.1 (4:9)	14.1 (4:8)	13.9 (4:4)	13.2 (4:5)	8.3 A~B	9.0 A~B	8.6 A~A	7.7 B~C	16.6 A~B	1352 (4:3)	8.8
保育所児	13.1 (5:0)	15.0 (4:7)	15.0 (4:9)	14.0 (4:8)	14.2 (4:7)	13.6 (4:7)	8.1 A~B	9.1 A~B	9.0 A~A	7.9 B~C	16.9 A~B	1370 (4:6)	9.3
幼稚園児	13.1 (5:0)	14.6 (4:5)	15.9 (4:11)	15.0 (5:2)	15.4 (5:1)	14.7 (5:0)	8.4 A~B	9.5 A~B	8.6 A~A	7.9 B~C	17.0 A~B	1406 (4:9)	9.8
全 体	13.1 (5:0)	14.9 (4:5)	15.3 (4:9)	14.3 (4:8)	14.7 (4:10)	14.2 (4:10)	8.4 A~B	9.2 A~B	8.8 A~A	7.9 B~C	17.0 A~B	1383 (4:7)	9.5

数字は粗点の平均 ()内はそれに対する年齢段階(以下の同種の表においても同じ)

A.....すぐれている B.....ふつ C.....おくれている

社会成熟度指数で各グループ間を比較すると、特に男女の間にはかなりの差がみられ、男子の方が高くなっている。幼児総合精神検査による社会的な生活能力指数では、女子の方が男子より高くなっていたのに対し、全項目を親が評定する本検査では逆の結果になっている。このことについては、評定者である親の評定のし方に問題があるように思われる。

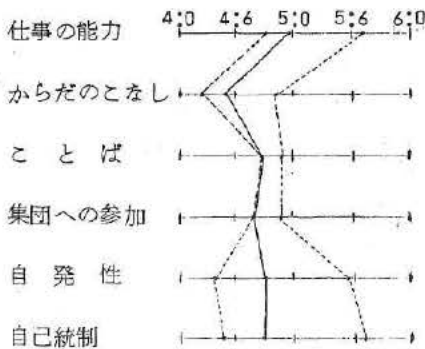
幼児総合精神検査による社会的な生活能力指数と、本検査による社会成熟度指数との相関関係をみると相関係数0.39(表からの推定による信頼度 5%水準で $0.12 < 0.39 < 0.59$, 1%水準で $0.04 < 0.39 < 0.65$)となり、両者の間には低い相関関係がみられる。これについての相関図表を男女別にとってみると、男子と女子の分布のし方に違いがみられる。すなわち、男子の方は社会成熟度指数の高い方に多く分布しているのに対して、女子の方は低い方に多く分布している。つまり、女子に対しては、一般に男子より社会成熟度が低く評定されているのである。この検査の評定者は主として母親であるが、同性である女子

に対しては、おのずときびしい評定態度となるのであろうか。男女合わせての全体としての平均では、「中」の段階で普通の発達状態を示している。

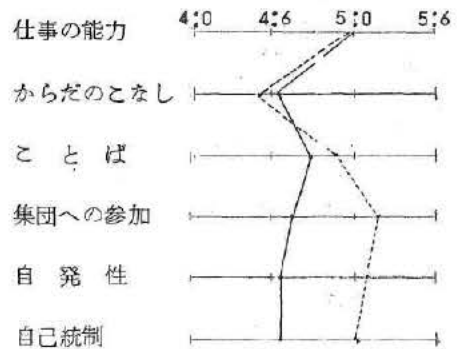
本検査の結果を内容的にみると、まず、社会生活能力の領域では、第7、第8図に示したように、男女間の差は、特に自発性、自己統制の項目にみられる。全体としては、からだのこなしの項目が、やや劣っている。これは、幼児の移動能力をみるものであるが、親の不安感から、「交差点を信号どおりわたれる」「車のよく通る道をひとりで安全に歩ける」などの項目にあてはまる経験を幼児に与えながらない結果、あらわれた数値であるように思う。幼児総合精神検査の常識の問題でみたように、車の通る道を安全に歩くのに必要な常識は、一応幼児自身はもっているようである。

第7図 社会成熟度プロフィール(男女別)

第8図 社会成熟度プロフィール(保育所・幼稚園別)



— 全体 --- 男子 ---- 女子



— 保育所児 ---- 幼稚園児

基本的習慣の領域では、大体普通の水準に身につけているが、睡眠の項目が、全体的にみてよいとはいえない。これは、幼児自身の能力にその成熟のおくれの原因があるのではなく、家庭そのもの、親の生活習慣そのものに原因があり、その影響を大きくこうむっているものと思われる。

なお、本検査による社会成熟度指数と、幼児総合精神検査による知能偏差値との間には、相関係数 0.32 が得られ、低い相関関係がみられる。

3) 親子関係診断テストの結果

親子関係診断テストの結果について、男女別、保育所・幼稚園別に、粗点の平均とそれに対応するパーセンタイルを示すと、第11表、第12表のようになる。

各対応するグループの間で、各類型ごとにパーセンタイルの近接する数値をとり出し、 χ^2 検定を行なった結果、母親については、各グループ間に有意の差はみられず、父親については、男女別グループ間の男子に対する厳格型と、保育所・幼稚園別グループ間の保育所児に対する積極的拒否型に、やや差がみられた。(※印 0.05の危険率……※, 0.01の危険率……※※) 全体的に、パーセンタイルが低めになっているのは、各類型ごとの設問に全部回答していない例がかなりあったためと思われる。

なお、父母の年齢は第13表のようになっており、30代が大部分を占めていることがわかる。

最後に、本検査による幼児の性格・行動上の問題徴候についてまとめておくと、第14表のようになる。

第11表 親子関係診断テスト(母親)

群	類型	消拒	積拒	厳格	期待	干渉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
男	子	17.1 (40~60)	15.9 (30~40)	13.0 (40~60)	16.1 (65~80)	14.2 (45~60)	12.2 (30~40)	17.5 (35~50)	15.9 (40~55)	14.7 (15~20)	15.3 (25~35)
	女	16.0 (25~40)	15.5 (30~40)	11.7 (15~25)	14.1 (40~50)	12.8 (25~35)	9.1 (15~20)	16.0 (25~35)	15.4 (40~55)	15.7 (20~30)	16.3 (35~50)
保育所児		16.0 (25~40)	15.2 (30~40)	12.1 (25~40)	15.2 (50~65)	13.4 (35~45)	10.0 (20~25)	16.5 (25~35)	15.5 (40~55)	14.9 (15~20)	15.5 (25~35)
幼稚園児		17.3 (40~60)	16.7 (40~60)	12.5 (25~40)	14.5 (40~50)	13.3 (35~45)	11.0 (25~30)	16.9 (25~35)	15.8 (40~55)	16.1 (30~45)	16.7 (35~50)
全 体		16.4 (25~40)	15.7 (30~40)	12.3 (25~40)	14.9 (40~50)	13.1 (35~45)	10.4 (20~25)	16.6 (25~35)	15.6 (40~55)	15.3 (20~30)	15.9 (25~35)

第12表 親子関係診断テスト(父親)

群	類型	消拒	積拒	厳格	期待	干渉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
男	子	16.4 (25~40)	16.3 (40~60)	12.8 (25~40)	16.9 (65~80)	14.6 (45~60)	12.0 (30~40)	16.8 (25~35)	15.2 (40~55)	14.4 (15~20)	16.2 (35~50)
	女	17.4 (40~60)	16.9 (40~60)	14.4 (60~70)	14.6 (40~50)	13.5 (35~45)	10.4 (20~25)	15.0 (15~25)	15.0 (40~55)	15.2 (20~30)	16.4 (35~50)
保育所児		16.6 (25~40)	15.9 (30~40)	12.6 (25~40)	15.7 (50~65)	14.0 (45~60)	10.8 (20~25)	16.4 (25~35)	15.0 (40~55)	14.6 (15~20)	15.8 (25~35)
幼稚園児		17.2 (40~60)	17.6 (60~75)	12.8 (25~40)	15.4 (50~65)	14.3 (45~60)	11.4 (25~30)	15.5 (15~25)	15.2 (40~55)	15.1 (20~30)	16.8 (35~50)
全 体 (43名)		16.9 (25~40)	16.7 (40~60)	12.7 (25~40)	15.5 (50~65)	14.1 (45~60)	11.1 (25~30)	16.0 (25~35)	15.1 (40~55)	14.8 (15~20)	16.3 (35~50)

数字は粗点の平均。()内はそれに対応するパーセントイルの範囲(以下の同種の表においても同じ)

第13表 父母の年令
(父親)

20代	2名
30代	38名
40代	9名
不詳	7名
(母親)	
20代	13名
30代	37名
40代	2名
不詳	6名

男女別では、反社会性の項目に、保育所・幼稚園別では、反社会性、非社会性、生活習慣の項目にやや差がみられるが、その他の項目には差がみられず、全体として大きな差とは考えられない。全体としての傾向では、

第14表 親の評定する問題徴候

群	項目	反社会性	非社会性	自己評価	退行性	神経質	生活習慣
男	子	3.1	3.2	1.5	1.1	1.4	2.7
女	子	2.5	2.9	1.6	0.9	1.5	2.7
保育所児		3.2	2.7	1.5	0.9	1.5	2.3
幼稚園児		2.0	3.6	1.7	1.1	1.5	3.3
全 体		2.8	3.0	1.6	1.0	1.5	2.7

数字は評定による得点の平均(以下の同種の表においても同じ)

反社会性，非社会性，生活習慣の項目に問題点が高くなっている。

2 社会性の発達のおくれている幼児

生活年齢が同じでありながら，年齢相応の社会性（主として社会的な生活能力）が身につけていない幼児について，その原因を探り，そのパーソナリティとの関連をとらえるために，社会性のおくれている幼児のグループ（非社会性群と呼ぶ）と，大体年齢相応に，あるいはそれ以上に社会性の発達している幼児のグループ（普通群と呼ぶ）とを比較検討する。

1) 非社会性群の選定

対象幼児58名の中から，幼児総合精神検査による社会的な生活能力指数の低いもの，すなわち，ここではS.Q.80以下の幼児を選び非社会性群とした。手引書によると，S.Q.は，(+2)(+1)(0)(-1)(-2)の5段階に評価されるようになってきているが，S.Q.80以下は(-2)の段階から(-1)の段階にわたるものである。これには，12名の幼児（男子6名，女子6名）が該当したが，これは対象幼児全体の約20%に当たる。

2) 社会性

まず，社会性の発達の差異について，内容的に両群を比較してみよう。

両群の生活年齢 第15表 社会的な生活能力および社会点

項目	親の 評定	a紙 切り	bハンカ チ結び	生活術 (a+b)	定義	常識	語い	S.Q.	社会点
非社会性 (12名)	24 (3才級)	4.1	2.5	6.6 (4才級)	2.2 (2才級)	3.5 (3才級)	1.2 (2才級)	62.1	-3.0 (-2)
普通 (46名)	27 (4才級)	5.5	4.4	9.9 (5才級)	5.8 (4才級)	5.4 (5才級)	4.7 (5才級)	106.7	+2.2 (0)

※ 社会点の()内は評価段階を示す………(+2)(+1)(0)(-1)(-2)の5段階

得点がかかなり低くなっており，これを年齢段階で比較すると，日常生活の自立（親の評定）と生活技術については，約1才の差がみられ，定義，常識，語いでは，2～3才の差がみられる。生活技術の面よ

第16表 紙切り

項目	非社会性	普通
はさみを使って形が切りぬける	10(833)	16(347)
ややきれいに切りぬける	1(83)	29(629)

第17表 ハンカチ結び

項目	非社会性	普通
結べない	5(41.6)	3(6.5)
1つ結び，またはこま結び1回	5(41.6)	9(19.4)
こま結び2回	2(16.6)	34(73.9)

第18表 常識

問題項目	非社会性	普通
1	10(83.3)	46(100.0)
2	11(91.6)	46(100.0)
3	5(41.6)	37(80.4)
4	11(91.6)	45(97.8)
5	0	33(71.7)
6	5(41.6)	37(80.4)
7	0	3(5.1)

り，言語的な面の差が著しい。

生活技術と常識について，各段階や問題項目の合格率を比較すると第16，第17，第18表のようになる。生活技術面の成熟程度に，かなりの差がみられると同時に，常識については，問題3，5，6に大きな差がみられる。

検査現場における幼児の態度は，社会点に表わされているように，普通群は(0)の段階で普通であるのに対し，非社

会性群は(- 2) の段階で社会的適応が非常に悪いことを示している。

この内容を項目別(+) と(-) の評定段階で比較すると、第 19 表のようになる。非社会性群の各項目に占めるパーセンテージは、普通群に比べ全体として、(+) の方に低く、(-) の方に高くなっており、特に、項目 2、4、5、6 においては、半数以上に(-) の評定がなされている。すなわち、質問に対していつまでも黙っている、表現力に乏しい、小さい声で話す、語尾がはっきりしない、わからないとき黙ってしまうなどの特徴が、非社会性群の幼児に多くみられるのである。

次に、親の評定による社会成熟度を両群について比較すると、次表のようになり、どの領域、項目についても、大体非社会性群の方が低い成熟度を示している。

第 20 表 社会成熟度

群	しごとからた		ことは		集参	自発性	自統	清潔	排泄	着衣	睡眠	食事	計	S.Q.
非社会性	12.6	13.0	14.1	13.4	12.9	13.0	7.9	8.6	8.9	7.8	17.2	1298	84	
	(4:11)	(3:9)	(4:4)	(4:4)	(3:11)	(4:5)	B~C	B~C	A~A	B~C	A~A	(4:1)		
普通	13.2	15.4	15.6	14.6	15.1	14.5	8.7	9.4	8.8	7.9	16.9	1405	98	
	(5:0)	(4:7)	(4:11)	(4:11)	(5:1)	(5:0)	A~B	A~B	A~A	B~C	A~B	(4:9)		

3) 知能

ついで、両群の知的側面について比較してみよう。

右の表のように、両群の間には、知能偏差値の平均で 16.3 の差がみられ、非社会性群の幼児は、普通群に比べ一般に知的能力が劣っているといえる。非社会性群内での、知能偏差値と社会的生活能力指数との相関関係をみると、相関係数は 0.67 となり、全体における相関係数 0.67 と差がない。このことから、社会的生活能力と知能との間には、かなり高い相関関係があり、社会性の発達には、ある程度知的能力が基礎となるものと考えられる。

第 21 表 知能偏差値

群	知能偏差値
非社会性	36.7
普通	53.0

しかしまた、このことについては、反面次のようにもいえる。すなわち、社会性(社会的生活能力)の各項目について両群を比較した場合に、特に、言語的側面での差が大きかったが、これは、同一の検査で知能、社会性の両側面を測定するようになってきていることに関係しているようである。したがって、それだけに、知的側面がよくなれば、社会性の側面にもよい影響が現われてくると思われるし、逆に、社会性が高まり表現力がつけば、知的側面にももっとよい結果が出てくるものと思われる。いずれにせ

第 19 表 検査場面における態度

評定段階 項目	(+)		(-)	
	非社会性	普通	非社会性	普通
1	8 (66.6)	42 (91.3)	0	0
2	2 (16.6)	32 (69.5)	6 (50.0)	2 (4.3)
3	0	14 (30.4)	4 (33.3)	4 (8.6)
4	0	6 (13.0)	9 (75.0)	9 (19.5)
5	0	17 (36.9)	7 (58.3)	8 (17.3)
6	1 (8.3)	20 (43.4)	7 (58.3)	4 (8.6)
7	1 (8.3)	10 (21.7)	2 (16.6)	4 (8.6)
8	0	6 (13.0)	4 (33.3)	6 (13.0)
9	0	3 (6.5)	4 (33.3)	3 (6.5)
10	0	0	2 (16.6)	4 (8.6)
11	0	0	1 (8.3)	1 (2.1)
12	0	1 (2.1)	3 (25.0)	3 (6.5)

ても、両者は相関連して、幼児のパーソナリティの特色を構成しているといえる。

4) 性格

非社会性群の幼児のパーソナリティの一端をとらえるために、幼児総合精神検査による性格面の反応と、親の評定による性格・行動上の問題徴候とについて、普通群と比較してみよう。

第22表 性格面の反応(人物画反応)

項目 群	S型	M型	F型	N型
非社会性	1(83)	4(333)	2(166)	2(166)
普通	3(75)	6(130)	11(239)	2(43)

第23表 親の評定する問題徴候

項目 群	反社会性	非社会性	自己評価	退行性	神経質	生活習慣
非社会性	2.8	5.8	2.7	0.8	1.4	2.6
普通	2.8	2.5	1.3	1.0	1.5	2.7

第22表(異常反応の方は、非社会性群の幼児の反応がほとんどなかったため省いた)から、非社会性群には、普通群に比べM型とN型にやや多くの反応がみられること、F型ではむしろ普通群の方に反応が多少多くなっていることがわかる。つまり、非社会性群の幼児の性格の特色として、一般に、自我の発動が弱小で消極的、依存的であり、自己のおかれた環境に充分適応できないため不安定性の傾向をもつものが多いといえる。これは、親の観察による評定の結果とも一致する。すなわち、第23表に示されているように、非社会性群の幼児は、非社会性、自己評価・興味・意志の問題の項目に、普通群に比べ問題の得点が多くなっている。

5) 親子関係

最後に、親子関係について両群を比較するが、非社会性群の父親の回答が非常に少なかったため、ここでは、母親についてのみ比較することにする。

第24表 親子関係(母親)

類型 群	消拒	積拒	厳格	期待	干渉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
非社会性	15.1 (15~25)	15.1 (30~40)	12.5 (25~40)	15.1 (50~65)	14.0 (45~60)	11.3 (25~30)	18.1 (50~70)	15.5 (40~55)	15.1 (20~30)	16.4 (35~50)
普通	16.6 (25~40)	15.9 (30~40)	12.2 (25~40)	14.8 (40~50)	13.2 (35~45)	10.1 (20~25)	16.2 (25~35)	15.6 (40~55)	15.4 (20~30)	15.8 (25~35)

各類型について、両群の間の差を検定したところ、有意の差はみられなかった。このことによって、両群の間には親子関係の差異が全然ないと考えすることはできない。なぜなら、個々の事例に当たってみると問題の親子関係は多くみられるし、また、その問題のあり方が個々の事例ごとに異なるため、多くの事例の平均値からその問題点を推察するのは容易でないと思われるからである。したがって、親子関係については、個々の事例ごとに、そのほかの条件との関連をとおして、考察する必要があると考える。

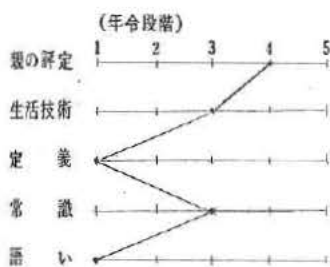
6) まとめと事例の紹介

以上、非社会性群の幼児について、普通群と比較しながら、社会性、知能・性格の各側面および親子関係の差異を検討してきたのであるが、結局、社会性の発達のおくれている幼児は、一般に知能および性格の側面にもマイナスの特色がみられ、どちらが原因であり結果であるかは判然としなないが、とにかく各側面は相関連して1つのパーソナリティを構成していることが理解された。次に、これを個々の幼児について、非社会性群の幼児ひとりひとりとは実際にどのような状態であるかを具体的にみるために、

いくつかの事例を簡単に紹介しておこう。(父母の年齢、職業は個人の秘密を守る意味から記さない)

事例1) A男児 生活年齢 4才5か月

第①図 社会的生活能力プロフィール



(1) 社会性 社会的な生活能力指数 53

生活技術は3才級、そのうちハンカチ結びは全然できない。常識も3才級で、定義と語いは答えないため0点となり1才級である。

検査場面での態度は、検査者が質問してもなかなか答えず、いつまでも黙っている、くり返し聞くとやっと答えるが、非常に小さい声である、言葉もやや赤ちゃん言葉で表現がはっきりしないなど、対人関係への適応がよくない。

親の評定による社会成熟度指数は90で、家庭における評価はやや高いようである。

(2) 知能・性格

知能偏差値は33である。

性格面では、M型の反応がみられた。自我の発動が弱小、消極的、依存的という類型にはいり、親の評定する問題徴候にも、ひっこみ思案、こわがりなど非社会性の問題点があげられている。園においては、自分から進んで友だちと遊ぶということができない状態である。

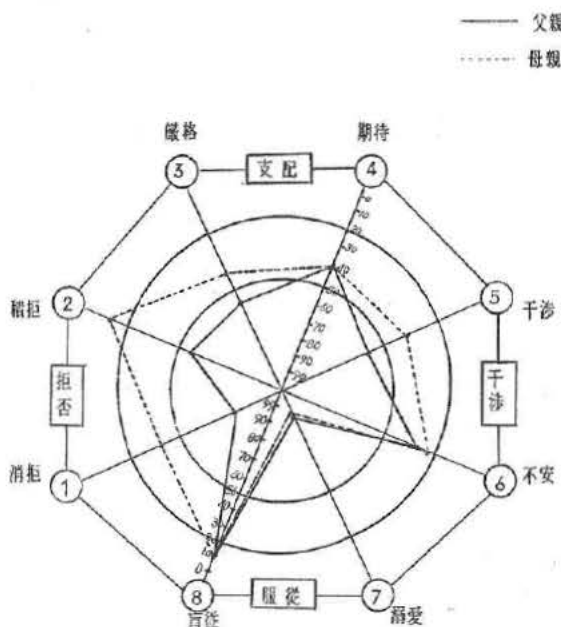
(3) 生育歴

(出生時) 正常 (体重) 2770g (発育) 普通 (栄養) 人工栄養 (病気) なし

(4) 家庭環境

両親とも勤めをもつ家庭で、本児のほか、弟と祖母がいる5人家族である。両親の本児に対する態度を親子関係診断テストで示すと右図のようになる。母親の態度については、積極的拒否、盲従、矛盾型に問題があり、父親についても、盲従、矛盾型に問題がある。両親ともに、子どもに対するしつけ態度に一貫性がなく、子どものいいなりになりやすい傾向をもっていることが問題点であると思われる。親の評定する本児の性格・行動上の問題徴候に、親や先生にしつこく甘える、泣虫であるという項目があげられているが、これも、上述の親の態度と関連があるとされる。このような親の養育態度が本児に影響を与えていることは否定できないが、現在の本児に対して、両親よりもっと直接の影響を与えているのは、働く母親に代わって本児の世話をしている祖母であるようだ。この祖母は、本児が「いつまでも赤ちゃんで何もできない」と称して、本児の身辺について、こまごまと世話をやくということである。このため、本児は自分の身の周りのことも自分でやろうとせず、依存心が大変強くなっている。つまり、本児の自立心と社会的態度を養育訓練が、家庭においてなされていない、あるいは、その機会が本児に与えられていないとみられるのである。

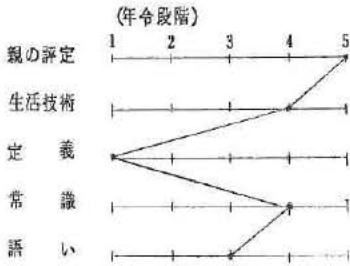
第②図 親子関係診断テスト



型	父	母
矛盾型	20	5
不一致型	80	60

事例2) B男児 生活年齢 5才2か月

第③図 社会的生活能力プロフィール



は年齢相応の発達を示しているが、判断と言語の面で特に劣っている。これは、上で述べた検査場面での態度から知られるように、すぐに「わからない」と答えて、済ませてしまおうとする拒否的な態度にも、大きく原因しているように思われる。

性格面では、人物画からS型の反応がみられ、自我は相当強いようである。親の評定する問題徴候では、一度いい出したら人の意見を聞かないなどの強情さがあげられているとともに、友だちと遊ばずひとりぼっちでいることが多い、ひっこみ思案、憶病、無表情など非社会性の問題点が多くあげられている。また、自律性に欠け依頼心が強い、根気がなくがまんしない、かんしゃくもち、泣き虫などの問題点もあげられている。検査場面では、終始からだを硬くして、質問に対しては即座に「わからない」と答え、人物画を描くときは、検査者にみえないように手でかくしながら描くなど、いささか子どもらしい無邪気さや柔軟性に欠ける感じがした。園においても、自分から進んで友だちと遊ぶことは決してしない。友だちと遊ぶことを、大変きらっているようにさえみえるということである。

(3) 生育歴

(出生時) 正常 (体重) 3750g

(発育) 普通

(4) 家庭環境

父親のいない家庭で、勤めをもつ母親と、兄、姉、本児の4人家族である。母親の本児に対する態度は、右の親子関係診断テストに示されているように、消極的拒否型に問題がみられる。兄、姉とのきょうだい関係が明らかでないので、じゅうぶんな推察はできないが、父親のいない家庭での母親の拒否的態度は、本児の円満なパーソナリティ形成に望ましくない影響を与えているように思われる。

事例3) O女兒 生活年齢 5才

(1) 社会性 社会的な生活能力指数6.4

日常生活での生活能力は親の評定で3才級、検査場面での生活技術は5才級である。定義は3才級、常識は4才級であるが、語いは答えないため0点である。

検査場面での態度は、社会点-9で、(-)の評定が対象幼児58名中最も多く、社会的適応のよくないことを示している。たとえば、質問には、いつまでも黙っている、小さな声で話す、検査中洋服やまわりにあるものをいじる、興味がなく消極的、緊張している

(1) 社会性 社会的な生活能力指数6.4

日常生活での生活能力は、親の評定で5才級とされているが、検査場面における生活技術は4才級である。ハンカチ結びは、1つ結びができる程度で、定義は「わからない」と答えて0点になっている。

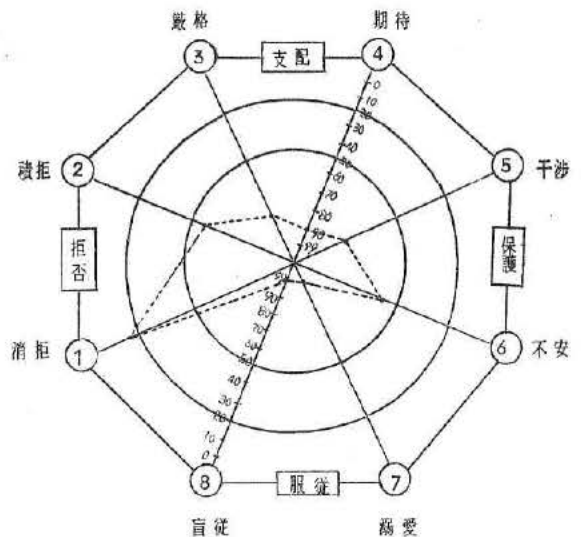
検査場面での態度は、検査者の質問に対して、すぐ「わからない」の応答をくり返し、やや拒否的な態度がみえる。

親の評定する社会成熟度は、指数7.6で、仕事の能力を除くほかの項目で、すべて低い評定がなされている。

(2) 知能・性格

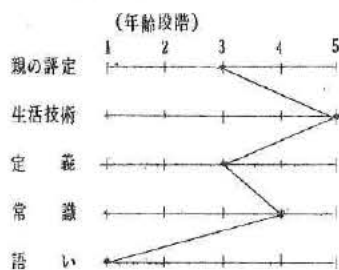
知能偏差値37。知的能力を診断的にみると、記憶・推理、非言語・数の面では年齢相応の発達を示しているが、判断と言語の面で特に劣っている。これは、上で述べた検査場面での態度から知られるように、すぐに「わからない」と答えて、済ませてしまおうとする拒否的な態度にも、大きく原因しているように思われる。

第④図 親子関係診断テスト



型	父	母
矛盾型		85
不一致型		

第⑤図 社会的生能力プロフィール



無口、友だちと遊ぶよりひとりでいることを好むなど、非社会性の項目に多くの問題点があげられている。園でも泣き虫の方で、友だちと元気に遊びまわることにはせず、保育につきまとう傾向が強いということである。

(3) 生育歴

(出生時) 正常 (体重) 3.187g

(発育) 普通 (栄養) 人工栄養

(4) 家庭環境

家族は、勤めをもつ父親と、家庭にいる母親、それに兄2人、姉1人、本児の6人家族である。本児は末子であるが、上の兄弟とは異母きょうだいである。本児に対する親の態度は、右の親子関係診断テストに示されているように、溺愛、盲従、不一致を除いて、どの項目もパーセンタイルが低くなっているが、特に拒否的態度に問題が見受けられる。本児に対しては、このような親子関係のほか、家庭内の複雑な人間関係が大きな影響を与えているように思われる。

などである。検査中、何度も泣き出しそうになり、検査者が励ましながらかつと検査を終了したのであるが、人物画をかくとき、ついに、しくしく泣き出してしまった。

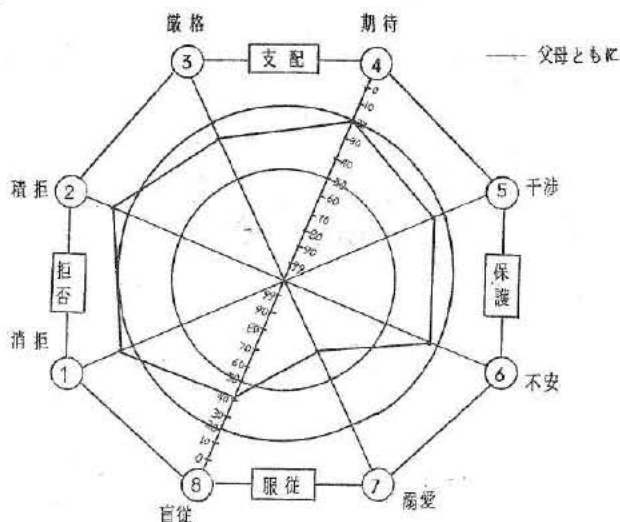
親の評定する社会成熟度は、指数65で、どの項目も低い成熟度を示している。

(2) 知能・性格

知能偏差値36。本児の場合も、特に、判断と言語の面が劣っているが、これについても、前事例のように、対人関係における適応の問題が影響しているように思われる。

性格面では、人物画にM型およびF型の反応がみられた。親の評定する問題徴候では、乱暴、強情などの問題点もあげられているが、むしろ、ひっこみ思案、憶病

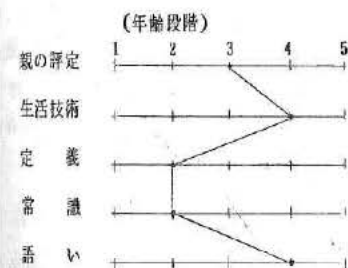
第⑥図 親子関係診断テスト



型	父	母
矛盾型	30	父に同じ
不一致型	80	

事例4) D女児 生活年齢 4才10か月

第⑦図 社会的生能力プロフィール



(1) 社会性 社会的生能力指数62

検査場面での生活技術は4才級で、はさみはうまく使えるが、ハンカチ結びの方は、ハンカチに手を触れようともせず結ばなかった。定義、語いは、すぐ「おからない」と答える。常識での解答では、自分にだけ通用する自己中心的な考え方がよく表われており、正解とされないものが多かった。

検査場面での態度は、質問に対してよく考えないで答える、語尾がはっきりしない、わからないとき黙ってしまう、興味がなく消極的などの傾向がみられ、社会点は-5と評定されている。また、終始指をくわえたり、なめたりしながら下を向いていて、検査に対し拒否的である。

親の評定する社会成熟度は、指数69で、仕事の能力を除くほかのすべての項目に低い評定がなされている。

(2) 知能・性格

知能偏差値 30。判断の面が特に劣る。

性格面は、人物画を描くことを拒否し、N型の評定がなされた。はじめての経験には非常な不安をもつのであろうか。検査場面における適応が極度によくないように感じられる。親の評定する問題徴候では、乱暴、けんか、わがまま、反抗、責任転嫁、浪費など、反社会性の問題点があげられている反面、人見しりする、ひとりぼっちであることが多い、外であったことや友だちのことを話さない、子どもらしくないなどの非社会性の問題点があげられており、また、自信や自律性に欠け、依頼心が強く、根気がないことも問題点にあげられている。

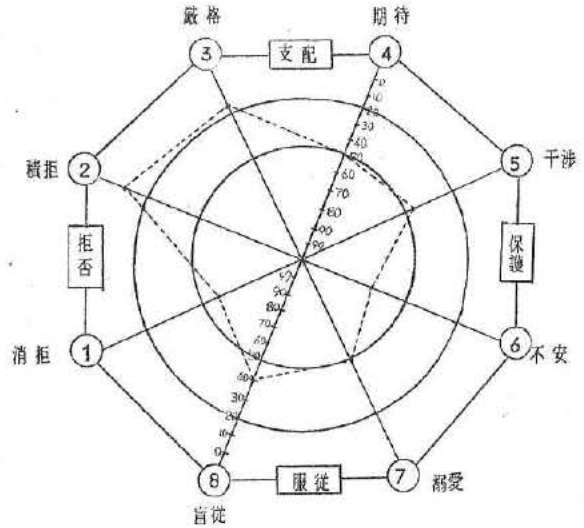
(3) 生育歴

親からの報告がないため不明

(4) 家庭環境

父親のいない家庭で、勤めをもつ母親と姉2人、本児の4人家族である。本児は、乳児期からずっと母親の手元を離れて祖母に育てられていたが、最近母親の手元に引き取られ、戻に通うようになったということである。したがって、本児にとって、母親は、じゅうぶんに身近な人としての存在になっていないようで、こうした母子関係と離れて育ったきょうだいの関係などがからみ合っ、対人関係への不適応を生み出しているように思われる。母親の本児に対する態度は、右の親子関係診断テストに示されているように、積極的拒否、厳格、矛盾型に問題がみられる。

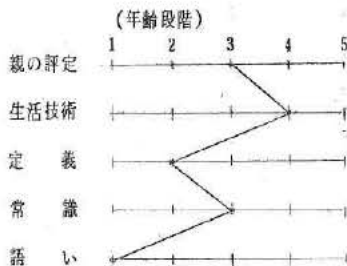
第⑧図 親子関係診断テスト



型	父	母
矛盾型	5	
不一致型		

事例 5) B 女児 生活年齢 4才10か月

第⑨図 社会的な生活能力プロフィール



(1) 社会性 社会的な生活能力指数 53

生活技術は4才級、はさみは使えるが、ハンカチ結びは1つ結びしかできない。定義、常識、語いは、なかなか答えられないため低い得点で、それに対応する年齢段階も低くなっている。

検査場面での態度は、検査者の質問に対して答える意志がないらしく、いつまでも黙っている。しかし、その表情は緊張がみられず、時々こここしたり、検査者の顔をじっとみつめたりする。

親の評定する社会成熟度は、指数71で、どの項目についても、低い評定がなされている。

(2) 知能・性格

知能偏差値 37。判断と言語の面が特に劣る。

性格面では、人物画にF型の反応がみられた。親の評定する問題徴候では、仲間に入らないで人のすることを見ていることが多い、人前で歌ったり話したりすることをきらう、人見しり、ひっこみ思案、憶病、おとなには、なれるが同年ばいの友だちになれない、新しい環境になかなかなじめないなど、非社会性の問題点が多くあげられている。園でも、友だちとは遊ばず、皆といっしょになって同じ行動をとることができない。

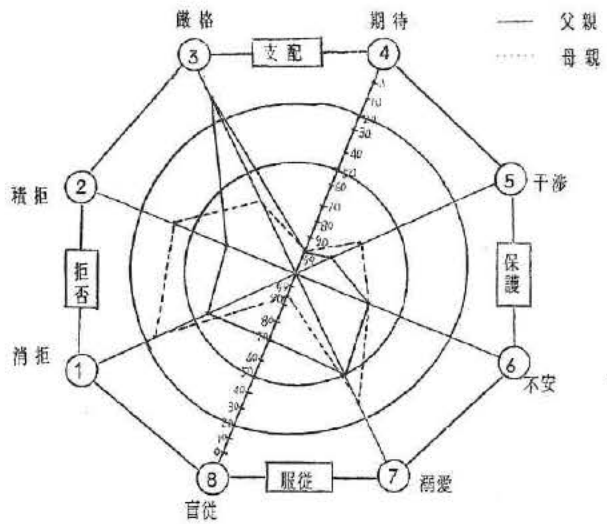
3) 生育歴

(出生時) 正常 (体重) 2,820g
 (発育) 普通 (栄養) 人工栄養
 (病気) 肺炎

(4) 家庭環境

両親とも勤めをもつ家庭で、妹と本児の4人家族である。両親の本児に対する態度は、右の親子関係診断テストに示されているように、父親は、厳格型に問題がみられ、母親には、特に問題はみられないが、消極的拒否型と弱愛型に、ややパーセントイルが低くなっている。両親それぞれについての親子関係と、小さい妹の存在とが、本児に何らかの影響を与えているように思われるが、この調査には現われていない要因が、なおほかにひそんでいるようにも思われる。

第10図 親子関係診断テスト



型	父	母
矛盾型	99	99
不一致型	80	60

3 きょうだいの有無，出生順位による影響

対象幼児58名について、きょうだいの数および出生順位を調べたところ、次のような結果になった。

第25表 きょうだい関係

1人子	11名 (18.9%)	1人子	11名 (男子3, 女子8)	
2人きょうだい	42名 (72.4%)	} 長子	20名 (男子10, 女子10)	
3人きょうだい	3名 (5.1%)		末子	27名 (男子11, 女子16)
4人きょうだい	2名 (3.4%)		中間子	0名

これらの幼児について、きょうだいの有無や出生順位のちがいが、そのパーソナリティにどのように影響しているかを検討するために、1人子、長子、末子の3グループを作り(それぞれ1人子群、長子群、末子群と呼ぶ)、比較してみることにする。

1) 社会性

社会的な生活能力では、1人子 第26表 社会的な生活能力および社会点

群が長子、末子群をひき離して指数が高い。内容的にみると、生活技術の面ではほとんど差がないが、定義と常識の面で、1人子群がすぐれている。検査場

項目群	親の評定	a紙切り	bペンカチ	生活技術(a+b)	定義	常識	語い	S.Q.	社会点
1人子	2.6	4.7	4.5	9.2	6.3	5.6	4.1	111.3	2.4
長子	2.6	5.5	3.6	9.1	4.8	4.8	3.9	93.2	0.6
末子	2.7	5.2	4.1	9.3	4.7	4.8	4.2	95.2	1.0

場面における態度も、社会点にみられるように
1人子群の適応が最もよいといえる。

親の評定する社会成熟度も、右図に示したよ
うに、1人子群が最もすぐれている。

2) 知能

知能面については、右表 第27表 知能偏差値
のとおりで、3群の間には
ほとんど差がないとみてよ
いが、どちらかという
と、1人子群が多少よい結果を
示している。

群	
1人子	51.5
長子	47.9
末子	50.5

3) 性格

性格面については、次の

2つの表から、次のような点が指摘できる。人物画反応の類型については、1人子群に、F型が多くみ
られ、S、M型は他の2群に比べて少なくなっている。

親の評定する問題徴候については、どの項目についても、1人子群は、ほかの2群に比べ問題点が低
くっており、特に、非社会性に関する問題点は目立って低くなっている。これに比べて、長子群には
非社会性の問題点が、ほかの2群に比べて最も高く、また、生活習慣の問題点も高くなっている。

第28表 性格面の反応

項目 群	S型	M型	F型	N型
1人子	0	1(90)	4(36.3)	1(90)
長子	2(100)	5(250)	3(150)	2(100)
末子	2(74)	4(148)	6(22.2)	1(37)

第29表 親の評定する問題徴候

群	反社会性	非社会性	自己評価	退行性	神経質	生活習慣
1人子	2.6	1.0	1.0	0.8	0.7	1.8
長子	2.7	3.7	1.6	1.5	1.4	3.2
末子	2.9	3.4	1.8	0.7	1.8	2.7

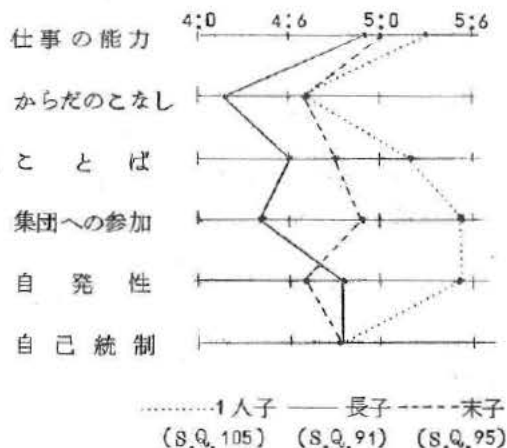
4) 親子関係

親子関係について、3群の間に差がみられるかどうかを検定したところ、母親については、1人子群
の溺愛型に、末子群の不一致型に差がみられた。(父親については、差がみられなかったので省略する)

第30表 親子関係診断テスト(母親)

群	消拒	積拒	厳格	期待	干渉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
1人子	16.0 (25~40)	14.9 (20~30)	11.2 (15~25)	13.4 (30~40)	12.4 (25~35)	10.0 (20~25)	14.5 (10~15)	14.4 (25~40)	16.9 (30~45)	17.0 (50~60)
長子	17.2 (40~60)	16.4 (40~60)	13.4 (40~60)	15.5 (50~65)	12.2 (25~35)	9.8 (15~20)	17.1 (35~50)	15.9 (40~55)	14.9 (15~20)	17.2 (50~60)
末子	16.1 (25~40)	15.6 (30~40)	11.9 (15~25)	15.1 (50~65)	14.2 (45~60)	11.0 (25~30)	17.5 (35~50)	15.9 (40~55)	15.0 (20~30)	14.6 (15~25)

第9図 社会成熟度プロフィール



5) まとめ

以上のことから、本対象幼児に関しては、次のようなことがいえる。1人子群には、欲求不満の傾向をもつものも若干いるが、一般に、性格・行動上の問題点は少なく、割合に社会性に富んでいる幼児が多いこと、きょうだいのある幼児の方では、特に長子群に、積極性、社会性に欠ける幼児が多いことである。親子関係については、1人子に対する溺愛と末子に対する不一致が、母親の態度に目立つ傾向である。これが、それぞれの群の特徴とどの程度結びつくかは、各群の家庭における子どものしつけや扱い方、さらには、子どもをとりまく文化的背景をもっと深く追究しなければ、明らかにすることはできないと思われる。

4 保育年数の長短による影響

保育所・幼稚園での集団生活の経験が、幼児のパーソナリティの発達に影響を与えていることは、否定できない事実であろう。そこで、その影響がどのようなものであるか的一端を知るために、対象幼児を、保育年数の長い幼児のグループ（長保育群と呼ぶ）と、保育年数の短い幼児のグループ（短保育群と呼ぶ）とに分け、両群を比較する。対象幼児の入園月日はまちまちになっているため、ここでは、保育年数1年以上のものを長保育群、1年未満のものを短保育群とした。

- 保育年数1年以上（長保育群）……………16名（男子 5, 女子 11）
- 保育年数1年未満（短保育群）……………42名（男子 19, 女子 23）

1) 社会性

社会性については、右表に示されているように、長保育群の方が、社会的生

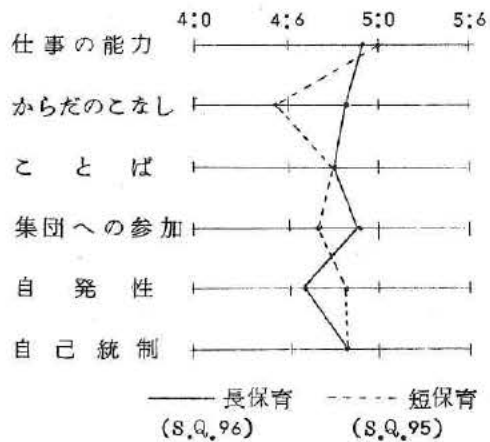
第31表 社会的生能力および社会点

項目	親の評定	a紙切り	bハカチ	生活技術 (a+b)	定義	常識	語い	S.Q.	社会点
長保育群	2.6	5.3	3.6	9.0	5.6	5.0	4.8	10.44	1.3
短保育群	2.7	5.1	4.1	9.3	4.8	5.0	3.6	9.49	1.0

活生能力指数で約1.0高くなっている。内容的にみると、長保育群は、親の評定と生活技術の面ではやや低めであるが、定義と語いの面で得点が高くなっている。検査場面における態度の評定も、長保育群の方が、いくらかよい得点を示している。

親の評定する社会成熟度は、指数については両群に差がないが、右図に示されているように各項目別にみると、多少差がみられる。

第10図 社会成熟度プロフィール



2) 知能

知能面については、右表のとおりで、両群の間にはほとんど差がないといえ

第32表 知能偏差値

群	知能偏差値
長保育群	49.2
短保育群	49.8

3) 性格

性格面については、次表のような結果がみられた。すなわち、人物画反応では、長保育群にM型の幼

児がやや多く現われているが、親の評定する問題徴候では、短保育群に非社会性の問題点が多くなっている。そして、長保育群には、非社会性の問題点は少ないが、反社会性をはじめ、そのほかの項目ではかえって問題点が多くなっている。

第33表 性格面の反応

項目 群	S型	M型	P型	N型
長保育群	0	4(250)	4(250)	1(62)
短保育群	4(9.4)	6(142)	9(214)	3(7.1)

第34表 親の評定する問題徴候

項目 群	反社会性	非社会性	自己評価	退行性	神経質	生活習慣
長保育群	3.3	2.1	2.2	1.2	2.2	3.0
短保育群	2.6	3.4	1.3	0.9	1.2	2.6

4) 親子関係

両群の親子関係については、次表のようになり、両群間の差を検定したところ、母親については差がみられず、父親については、長保育群の拒否的態度と盲従型に差がみられた。

第35表 親子関係診断テスト(両親)

群	類型	消拒	横拒	厳格	期待	干渉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
母 親	長保育群	15.5 (15~25)	14.4 (20~30)	12.7 (25~40)	15.7 (50~65)	12.7 (25~35)	9.4 (15~20)	16.3 (25~35)	14.3 (25~40)	15.3 (20~30)	15.9 (25~35)
	短保育群	16.8 (25~40)	16.2 (40~60)	12.0 (25~40)	14.5 (40~50)	13.6 (35~45)	10.8 (20~25)	16.7 (25~35)	16.1 (55~70)	15.3 (20~30)	15.9 (25~35)
父 親	長保育群 (12名)	14.0 *** (5~15)	14.6 *** (20~30)	12.8 (25~40)	16.5 (65~80)	13.5 (35~45)	10.5 (20~25)	17.5 (35~50)	13.8 *** (15~20)	14.1 (15~20)	15.4 (25~35)
	短保育群	17.3 (40~60)	17.1 (60~75)	12.7 (25~40)	15.2 (50~65)	14.3 (45~60)	11.3 (25~30)	15.4 (15~25)	15.6 (40~55)	15.1 (20~30)	16.7 (25~35)

5) まとめ

以上の結果から、この両群についての知的能力と親子関係(母親)における差は、ほとんどないとみられる。したがって、このことを両群の共通条件と考えて、この両群については、知的能力と親子関係(母親)および社会的階層にほとんど差がなく共通しているという条件で比較するならば、前述した社会性についての両群のわずかな差は、保育年数の長短による影響と考えられる。つまり、保育所、幼稚園での生活の経験の長い幼児の方が、わずかながら社会性においてすぐれており、それが特に、言語的な面によく現われているといえる。しかし、反面、性格面における問題点は、保育年数の短い幼児の群より、少しではあるが多くなっていることに注意したい。

5 共かせぎ家庭と普通家庭の幼児

共かせぎは、最近増加する一方である。共かせぎ家庭の幼児と共かせぎでない家庭の幼児とでは、そのパーソナリティ形成に差異が出てくるかどうかを確かめることは、すべての幼児の健やかな成長発達を考える上に、必要なことである。この点を検討するために、本研究の調査資料から知られる範囲で、共かせぎ家庭の幼児のグループ(共かせぎ家庭群と呼ぶ)と、共かせぎでない家庭の幼児のグループ(普通家庭群と呼ぶ)を作り、両群を比較検討する。ここで共かせぎ家庭というのは、母親が家庭の外に

仕事をもって働いている場合——したがって、子どもの養育は、母親以外の人にゆだねられる——に限った。母親が家庭にいて、子どもの養育に直接当たっている家庭は普通家庭とし、明確に分けられないものは除外した。

共かせぎ家庭群…………… 17名(男子 6, 女子 11)

普通家庭群…………… 26名(男子 11, 女子 15)

※共かせぎ家庭の母親の仕事の内訳

学校関係…………… 6名 県庁・市役所…………… 3名 美容院…………… 1名
 病院関係…………… 4名 市場・商店事務…………… 2名 衣料商…………… 1名

1) 社会性

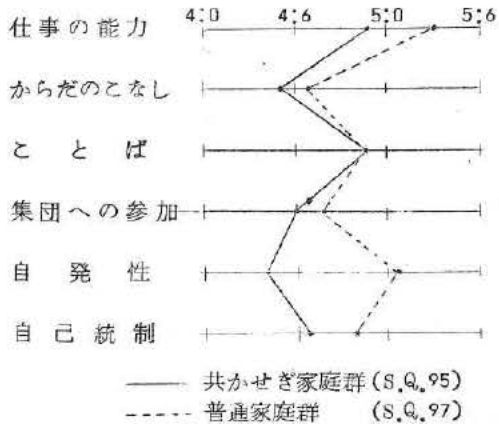
社会的な生活能力および社会成熟度の各項目別に見ると、多少差がみられるが、指数については両者とも、両群の間にはほとんど差はないといつてよい。

第36表 社会的な生活能力および社会点

項目群	親の評定	a紙切り	bハンカチ	生活技術(a+b)	定義	常識	語い	S.Q.	社会点
共かせぎ	2.6	5.3	3.7	9.0	4.9	5.3	4.5	99.7	2.2
普通	2.7	5.4	4.3	9.8	5.1	5.1	3.7	99.0	1.5

検査場面における態度では、社会点に示されているように、共かせぎ家庭群がややよくなっている。

第11図 社会成熟度プロフィール



2) 知能

知能面については、右の表に示されているように、両群の間にはほとんど差がないとみられる。

第37表 知能偏差値

群	知能偏差値
共かせぎ	52.0
普通	50.6

3) 性格

人物画反応における類型の現われには、両群にはほとんど差がないが、親の評定する問題徴候では、項目によって多少差がみられる。特に目立つものでは、非社会性の問題点が共かせぎ家庭群にやや多く、反社会性の問題点が普通家庭群にやや多いことである。そのほかの項目では、共かせぎ家庭群に問題点が低くなっている。

第38表 性格面の反応

項目群	S型	M型	F型	N型
共かせぎ	0	2(11.7)	4(23.5)	0
普通	1(3.8)	4(15.3)	6(23.0)	0

第39表 親の評定する問題徴候

項目群	反社会性	非社会性	自己評価	退行性	神経質	生活習慣
共かせぎ	1.8	3.5	0.8	1.1	1.2	2.5
普通	3.0	2.1	1.8	1.1	1.8	3.1

4) 親子関係

親子関係については、次ページの表に示したとおりで、母親については、両群の間に差はみられず、父親については、普通家庭群の期待型に差がみられたのみである。

第40表 親子関係診断テスト(両親)

群		類型	消拒	積拒	厳格	期待	干渉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
母	共かせぎ		16.7 (25~40)	15.7 (30~40)	12.4 (25~40)	16.7 (65~80)	13.4 (35~45)	11.9 (25~30)	17.2 (35~50)	16.2 (55~70)	16.9 (30~45)	17.0 (50~60)
		普通	17.0 (40~60)	15.8 (30~40)	11.9 (15~25)	14.0 (40~50)	12.9 (25~35)	9.8 (15~20)	17.0 (35~50)	15.7 (40~55)	14.5 (15~20)	15.5 (25~35)
父	共かせぎ (16名)		17.0 (40~60)	16.4 (40~60)	12.3 (25~40)	17.2 (80~90)	14.5 (45~60)	12.1 (30~40)	16.5 (25~35)	15.8 (40~55)	15.8 (20~30)	16.6 (35~50)
		普通 (20名)	16.8 (25~40)	16.9 (40~60)	13.1 (40~60)	14.7 (40~50)	13.6 (35~45)	10.3 (20~25)	16.0 (25~35)	14.7 (25~40)	14.6 (15~20)	16.4 (35~50)

5) まとめ

以上の結果から、現在の発達段階における本対象幼児に関しては、次のようなことがいえると思う。共かせぎ家庭の幼児は、母親がいつも幼児の身近にいないことが、親の愛情の欠乏として問題にされやすいが、母親が終日幼児についていなくとも、母親に代わる養育者あるいは保育施設で適正に育てられるならば、共かせぎという条件が、幼児のパーソナリティ形成に、決して悪い影響を与えるものではないということである。本研究対象の場合は、共かせぎ家庭といっても、さまざまな形態の共かせぎ家庭の中では、恵まれた条件をもつ家庭層であるかもしれない。あるいはまた、共かせぎの家庭内で欠けているものが、園での生活で補われているのかもしれない。共かせぎ家庭の幼児について、親の評定では非社会性の問題点が多くなっているが、実際の検査場面における社会性はむしろよく、社会的適応は決して悪いとはいえない。いずれにしても、とにかく共かせぎ家庭の幼児が特に劣るという事実がみられなかったことは、働く母親にとって心強く、幼児の家庭教育に自信を持たせるものであると思う。同時に、働く母親に代わって、専門的な立場から幼児を保育する充実した施設の増設が強く望まれるのである。

おわりに

幼児の社会性はどのように発達するのか、それはパーソナリティの発達にどのように結びついているのか、ということを中心課題に資料を整理したのであるが、本年は3年計画の第1年次に当たり、生活年齢の発達段階による差異はみることができないため、主として、同一年齢内における社会性の発達程度の差異、環境条件の違いによる社会性発達の差異を中心に調べてきた。

その結果、同じ生活年齢にある幼児の中でも、社会性の発達程度には非常に個人差があること、個人差の原因と考えられるものには、知的能力の違い、環境条件の違いが考えられることが明らかになり、また、社会性の発達の程度がパーソナリティの特徴にあらわれてきていること(特に、社会性の発達のおくれている幼児に)がわかった。

以上の結果は、主として標準化された発達検査や、親子関係検査を実施して得られた資料に基づくもので、研究方法については、反省しなければならぬ点が多くあると考えている。まず、親子関係の診

断についてであるが、これについては、Ⅱにおいて述べたので、ここではくり返さない。ただ、幼児に關しては、親子両面から資料を得る方法のむずかしさを、つくづく感ずるのである。第2に、幼児をとりまく環境条件の文化的側面の追究が欠けていたこと、第3に、幼児の社会性を調査するのに既製の検査用紙を使用したことは、社会性の内容をさまざまな側面からみる上に限度があったこと、特に、幼児の交友関係を観察する面が欠けていたことなどがあげられる。

第2年次は、以上の反省の上から立って、研究をすすめたいと考えるが、特に、次の点に重点をおいて、幼児の社会性の発達あるいはパーソナリティの発達についての追究を行なう予定である。すなわち、本年4～5才であった対象幼児は、来年度5～6才になり、就学前の、いわば学校生活に入る準備段階の時期に当たるので、この幼児たちの精神的な成長のあとをたどり、幼児同志の交友状況や、園での生活状況を調査して、集団生活への適応がどのように行なわれているかを中心に追究していきたいと考える。

おわりに、この研究調査を実施するにあたり、積極的にご協力いただいた各保育所、幼稚園の諸先生ならびに父母の方々に、深く感謝の意を表するものである。この研究を担当し、執筆したのは池田要子である。

参 考 文 献

- | | | |
|---------------|-----------------------------|--------|
| 大西憲明編 | 「保育診断講座 1 (1 , 2 , 3) | 黎明書房 |
| 波多野完治ほか | 「現代心理学大系」(4) | 中山書店 |
| 東京文理科大学児童研究会編 | 「児童心理叢書」(Ⅱ , Ⅶ) | 金子書房 |
| 高木正孝ほか | 「教育社会心理学」 | 朝倉書店 |
| 戸川行男ほか | 「性格心理学講座」(3) | 金子書房 |
| 山下俊郎 | 「改訂幼児心理学」 | 朝倉書店 |
| A・T・ジャーシルド | 「児童心理学」 | 金子書房 |
| 青木誠四郎 | 「児童心理学」 | 朝倉書店 |
| 波多野完治編 | 「児童心理学ハンドブック」 | 金子書房 |
| 牛島義友 | 「家族関係の心理」 | 金子書房 |
| アドラー | 「子どもの劣等感」 | 誠信書房 |
| 城戸幡太郎 | 「幼児の教育」 | 福村書店 |
| 東京教育大学教育学研究室編 | 「幼稚園教育」 | 金子書房 |
| 波多野勤子 | 「幼児の心理」 | 光文社 |
| 下出智子 | 「集団育児」 | 紀伊国屋新書 |
| 田中寿美子 | 「新しい家庭の創造」 | 岩波書店 |
| 牛島義友・星美智子 | 「幼児総合精神検査」 | 金子書房 |
| 研究紀要 | 「京都大学教育学部紀要」 | |
| 雑誌 | 「児童心理」(39年第18巻6号, 9号, 11号) | 金子書房 |